

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

人物で見る第二次世界大戦

The Second World War in Personal Perspectives

2. 研究代表者氏名

林田 敏子

HAYASHIDA, Toshiko

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(2年目)

4. 研究目的

2007～2015年に人文研で行われた第一次世界大戦についての共同研究は、国内外から注目される成果を少なからず生んだが、しかし、「現代の起点」となった「未完の戦争」たる第一次世界大戦がいかなる「現代」を現出させたのか、という問いは依然として残されている。とりわけ、僅か20年の時を隔てて再び惹起されたもう1つの世界大戦の理解を抜きに、「現代」を語りえないことは論を俟たない。本研究班は、第一次世界大戦研究のそれのみならず、「人文学 beyond 2020」を精力的に議論してきた「21世紀の人文学」班の成果をも引き継いだうえ、この間次々と発表されている世界大戦の世紀に関する最新の研究に基づいて、終戦から80年を控えた第二次世界大戦の新たな全体像を構築し、混沌とした現代世界を把握するための見通しを提示することを目的とする。その際、本研究班では、ヒューマン・ファクターに着目して第二次世界大戦を検討する方法を採用する。第二次世界大戦の理解にあたって重要な論点にかかわってくる特定の人物に則して、この戦争を特徴づける諸側面を浮き彫りにする、との意図からである。

The First World War, the foundational event of the modern world, was examined in the research project, 'A Trans-disciplinary Study of the First World War', conducted at the Institute from 2007 to 2015. A vital question to be inquired next: What kind of modern world emerged out of ashes of the First World War? In tackling this question, a comprehensive reconsideration of the Second World War, another global convulsion within twenty years since the end of the first, is absolutely essential.

The research project attempts to draw a fresh and updated overall picture of this traumatic catastrophe with an emphasis on the human factors. As Ian Kershaw points out, the Second World War was 'a war of apocalyptic proportions', which certainly brought 'an assault on

humanity unprecedented in history'. Especially the genocidal mass murder of Europe's Jews was 'the lowest point of mankind's descent into the abyss of inhumanity'. Therefore the task, raised by Timothy Snyder, 'turning the numbers back into people', is acutely posed to all of us as researchers and humanists. Human perspectives adopted by the project could be meaningful in challenging this formidable task.

5. 本年度の研究実施状況

令和5年度は、台風で中止となった1回を除いて6回の例会を開催した。そのうち2回はゲストを報告者に招き、4月例会では近年のアジア・太平洋戦争の研究動向について、11月例会では戦後日本・地域占領研究について、専門家の知見を提供してもらった。班員による報告は、7月例会が「戦後日本の中国研究者による日中戦争研究と中国の日中戦争認識」、10月例会が「戦争の記憶と社会——独ソ戦期のソ連における従軍記者の活動」、1月例会が「証言はフランス文学に何をもたらしたか」、3月例会が「第二次世界大戦は（非）亡命作曲家にどのような影響を与えたか」をテーマとした。本研究班の設立趣旨に沿った研究発表が増えたことに伴って、例会における討論は明らかに充実の度を増してきている。

6. 本年度の研究実施内容

- 2023-04-15 人物で見る第二次世界大戦 最近のアジア・太平洋戦争史関連の研究動向 発表者 古川隆久 日本大学
- 2023-07-22 人物で見る第二次世界大戦 戦後日本の中国研究者による日中戦争研究と中国の日中戦争認識 発表者 小野寺史郎 人間・環境学研究所
- 2023-10-07 人物で見る第二次世界大戦 戦争の記憶と社会——独ソ戦期のソ連における従軍記者の活動 発表者 立石洋子 同志社大学
- 2023-11-25 人物で見る第二次世界大戦 戦後日本・地域占領研究を読み直す 発表者 長志珠絵 神戸大学
- 2024-01-20 人物で見る第二次世界大戦 証言はフランス文学に何をもたらしたか 発表者 久保昭博 関西学院大学
- 2024-03-02 人物で見る第二次世界大戦 第二次世界大戦は（非）亡命作曲家にどのような影響を与えたか 発表者 浅井佑太 お茶の水女子大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

本研究班に関連して令和5年度に出版された書籍は以下の通り。岡田暁生 & 片山杜秀『ごまかさないクラシック音楽』（新潮社）、岡田暁生（編）『配信芸術論』（アルテス）、浅井佑太『シェーンベルク』（音楽の友社）、Tatsushi Fujihara (ed.), Handbook of Environmental History in Japan (Amsterdam University Press); Akihiro Kubo et al. (eds.), The Routledge Handbook of Fiction and Belief (Routledge); Akihiro Kubo et al. (eds.), Impossible Fictions

/ Fictions impossible (Fabula (Colloques ローラ・ハイン著、中野耕太郎&奥田博子訳『ポストファシズムの日本—戦後鎌倉の政治文化』 (人文書院)、マールテン・ヴァン・ヒンダーアハター&ジョン・フォックス編金澤周作&桐生裕子監訳『ナショナリズムとナショナル・インディファレンス』(ミネルヴァ書房)、瀬戸口明久『災害の環境史—科学技術社会とコロナ禍』(ナカニシヤ)

8. 研究班員

所内

小関隆、岡田暁生、藤原辰史、瀬戸口明久、福家崇洋

学内

小野寺史郎(人間・環境学研究科)、駒込武(教育学研究科)、小山哲(文学研究科)、金澤周作(文学研究科)

学外

林田敏子(奈良女子大学大学院生活環境科学系)、中野耕太郎(東京大学総合文化研究科)、小野容照(九州大学人文科学研究院歴史学部門)、浅井佑太(お茶の水女子大学 基幹研究院人文科学系)、橋本伸也(関西学院大学文学部)、久保昭博(関西学院大学文学部)、立石洋子(同志社大学グローバル地域文化学部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	8	0	0	0	0	32	0	0	0	0
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	3	8	0	0	1	3	28	0	0	5	9
		(3)	(0)	(0)	(1)	(0)	(9)	(0)	(0)	(5)	(0)
国立大学 (内女性)	4	4	0	0	0	0	18	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学 (内女性)	2	4	0	0	0	0	16	0	0	0	0
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(8)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他 ※ (内女性)	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	11	25	0	0	1	3	98	0	0	5	9
		(9)	(0)	(0)	(1)	(0)	(26)	(0)	(0)	(5)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	8		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月	論文名	発表者名
1	『ユリイカ』	1	R5.4	「牧野富太郎の山歩き——植物採集の王国」	瀬戸口明久
2	『人文學報』、京都大学 人文科学研究所、第 121 号	1	R5.6	「脳裏に音楽が鳴り響くとい うこと ——シェーンベ ルクとウェーベルンの作曲 プロセスによせて」	浅井佑太
3	『歴史評論』 878 号	1	R5.6	「ポスト・トゥルース時代 の歴史認識——米国「歴史 戦争」から 1619 年プロジ ェクト論争へ」	中野耕太郎
4	『歴史評論』 第 878 号	1	R5.6	「「歴史」の書かれ方と 「記憶」のされ方——人々 はなぜ過去をめぐって諍い を起こすのか」	橋本伸也
5	『軍事史学』 59(1)	1	R5.6	「大岸頼好と国家改造運 動」	福家崇洋
6	Archiv für Musikwissenschaft, vol. 80/2	1	R5.7	„Anton Webern und abstrakte Gesetzmäßigkeiten. Zum kompositorischen Prozess des dritten Satzes seines Streichquartetts op. 28“	Yuta Asai
7	『思想』 第 1191 号	1	R5.7	「出会いと再会——E・H・ カー『歴史とは何か』のグロ ーバリティとローカリテ ィ」	小山哲
8	『歴史学研究』第 1037 号	1	R5.7	「「ウクライナ史」とはなに か?——国民史の構築と記 憶の衝突」	橋本伸也
9	黛秋津編『講義 ウクライ ナの歴史』	1	R5.8	「リトアニア・ポーランド 支配の時代——十四～十八 世紀の近世ウクライナ地 域」	小山哲

10	斎藤幸平&松本卓也(編) 『コモンの「自治」論』	1	R5.8	「食と農から始まる「自治」 ー権藤成卿自治論の批判 の先に」	藤原辰史
11	『社会思想史研究』第 47 号	1	R5.9	「近代中国におけるナショ ナリズムとリベラリズム」	小野寺史郎
12	『岩波講座世界歴史 16 国民国家と帝国 : 一九 世紀』	1	R5.9	「海域から見た一九世紀世 界」	金澤周作
13	高木博志編『近代京都と 文化 「伝統」の再構築』	1	R5.9	「戦時下の新村出」	福家崇洋
14	井野瀬久美恵(責任編集) 『つなぐ世界史』3 近現 代/SDGs の歴史的文脈 を探る	1	R5.9	「概説 新世界秩序の相剋 とファシズムの台頭」	福家崇洋
15	三輪眞弘監修・岡田暁生 編『配信芸術論』	1	R5.10	「機械化時代の音楽・科 学・人間——兼常清佐のピ アノの実験」	瀬戸口明久
16	『思想』1194 号	1	R5.10	「巨大なものとしての科学 ——一九六〇年代科学論に おけるポストヒューマニズ ム」	瀬戸口明久
17	『社会科学』第 53 巻、 第 3 号	1	R5.11	「ウクライナとロシアにお ける記憶の政治と知識人ー ー2000 年代後半から 2014 年のロシアの知識人の活動 を中心にー」	立石洋子
18	『ロシア史研究』第 111 号	1	R5.12	「競合する歴史解釈と分裂 する社会——現代ロシアの 記念碑論争と自国史像をめ ぐる対立」	立石洋子
19	『世界』第 977 号	1	R6.1	「植民地主義者とはだれ か」	駒込武
20	喜多千草編著、『20 世紀 の社会と文化——地続き の過去を知る』	1	R6.1	「大衆社会——両大戦間 期のアメリカ」	中野耕太郎

21	ZINBUN, no.54	1	R6.3	The 1960s and the Rise of Thatcherism	Takashi Koseki
22	『関西学院史学』第51号	1	R6.3	『創造された「故郷」』余滴——東・西プロイセンの「人民投票」と大日本帝国の外交官——	橋本伸也

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	シェーンベルク	浅井佑太	R5.4	音楽之友社	
2	ごまかさないクラシック音楽	岡田暁生 & 片山杜秀 (共著)	R5.5	新潮社	
3	ナショナリズムとナショナル・インディファレンスー近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容	マールテン・ヴァン・ヒンダーアハター & ジョン・フォックス編 金澤周作 & 桐生裕子監訳	R5.6	ミネルヴァ書房	
4	Handbook of Environmental History in Japan	Tatsushi Fujihara (編)	R5.7	Amsterdam University Press	○
5	ポストファシズムの日本ー戦後鎌倉の政治文化	ローラ・ハイン著、中野耕太郎 & 奥田博子訳	R5.9	人文書院	
6	配信芸術論	岡田暁生(編)	R5.10	アルテスパブリッシング	
7	The Routledge Handbook of Fiction and Belief	Alison James, Akihiro Kubo and Françoise Lavocat (共編)	R5.12	Routledge	○
8	Impossible Fictions / Fictions impossible	Françoise Lavocat, Alison James et Akihiro Kubo (共編)	R5.12	Fabula (Colloques)	○
9	災害の環境史ー科学技術社会とコロナ禍	瀬戸口明久	R6.1	ナカニシヤ	

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

令和 6 年度は本研究班の最終年度にあたり、計 10 回の例会の開催が予定されている。いずれの例会でも、人物に焦点を合わせつつ第二次大戦を考えるうえで重要な論点を析出し、第二次大戦そのものの認識に新たな知見を提示する、という研究班の課題設定に即した個別研究が発表されるものと思われる。また、6 月には公開の 4 回連続セミナーとして、「第二次世界大戦再考」を行うことも企画されている。最終年度である以上当然のことだが、研究成果をいかなるかたちで具体化するか、についても検討を重ねることとなろう。

15. 次年度の経費

		開催回数	延べ人数	支出予定額（円）
国内旅費	一般旅費	0		
	招へい旅費	10	30	450000
海外旅費	一般旅費	0		
	招へい旅費	0		
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				165,000
消耗品等経費				50,000
その他				
合計				665,000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

6 月に連続セミナー「第二次世界大戦再考」を開催することとし、準備を進めている。具体的には、第 1 回：藤原辰史「ナチスの「飢餓計画」を考える：ヘルベルト・バッケ」、第 2 回：駒込武「台湾人にとっての戦争経験と植民地経験：異郷を漂流する亡魂」、第 3 回：林田敏子「キッチン・ソルジャー：第二次世界大戦期イギリスにおける主婦の戦い」、第 4 回：岡田暁生「無力な老大芸術家は大战をどう耐え忍んだか：ナチス時代のリヒャルト・シュトラウス」。書籍刊行については、既に人文書院との間で話し合いを進めている。